



第11回：第2章-その4-

私のこの本



著：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

ホモ・サピエンスの力の源泉



ユヴァル・ノア・ハラリ「サピエンス全史」では、私たちホモ・サピエンスが食物連鎖の頂点に上り詰め、生態系の頂点に君臨できたのは、「虚構（フィクション）」の力が鍵となっていると書かれています。

人間が安定した関係性を維持できる人数は、150人が限界で、それ以上になると相互理解が難しくなります。しかし虚構を信じる力によって、神話や宗教、法律、人権、平等、会社、国家を生み出し、多数の人と繋がれるようになった人類は、生物として最強になっていき、他の生物を支配し、滅亡させていくことになります。

ホモ・サピエンスが獲得した、この虚構を作り出す力とは、どのようなものなのでしょうか？

虚構を生み出す言語行動

2021年の企画ワークショップでは、谷晋二（2020）「言語と行動の心理学」を取り上げさせていただきました。この本には、人間の言語と認知に関する行動分析的な理論である「関係フレーム理論」について書かれています。この関係フレーム理論こそ、虚構を生み出す力として機能している行動的原理といえます。

この虚構を作り出す言葉の力には、ダークサイドとライトサイドの二つの側面があります。ヒトは時には言葉によって苦しみ鬱々とする一方で、言葉によって人々は協力し合って困難な事態も克服してきました。

この虚構を作り出す言葉の力に行動分析学が科学的な



メスを入れて、その機能を解き明かし、そして活用しようとしています。

高い自己肯定感が好ましいとは限らない

この関係フレーム理論から分析すると、高い自己肯定感を育てようとする指導が必ずしも好ましいとは言えないことが分かってきます。「何かができる」、「有能である」、「他者の役に立つ」など、一見ポジティブな評価を一方的に与える指導を行った場合、反対の関係フレームが派生的に作り出され、「役に立たないのであれば、存在しないほうがよい」という自己否定につながることもあるといいます。

こうしたことを避けるために、「ダメな部分ももっている」、「良い部分ももっている」という階層的なフレームづけを習得させることが重要であるとしています。このことは関係フレーム理論が、言葉のダークサイド面の解決に役立つことを示しています。

知能（IQ）は Bad word

言葉のライトサイド的側面を、関係フレーム理論を使って伸ばす取り組みも行われています。イギリスの研究者たちが取り組んでいる SMART Brain Training はオンライン上で、関係反応を訓練することで、知能指数を大きく向上させる取り組みを行い、大きな実績を残しているといいます。これまで、知能という生涯を通じて安定したものであると考えられてきましたが、「知能は、特性でなく、生涯を通じて変化するし、学習によって変化する行動である」ということを実証してきました。



関係反応づけの正確さと流暢性を高めることで、知能指数は大きく伸びるという事実は、これからの教育を変える力を秘めていると感じます。

関係フレーム理論はおもしろい

言葉のもつ力に行動分析学としてどう立ち向かうのか、関係フレーム理論がその一つの答えだと思います。本の中身について紹介させていただきましたが、私の誤読があるかもしれませんので、興味がありましたらぜひ手に取ってみてください！

—つづく—